

デューイの「道徳の過程」の教育的意味について

加 藤 守 孝

The Educational Meaning of Dewey's "Moral Process"

KATO Moritaka

I. はじめに

一般的な語義からすると、道徳とは「人が人らしくふみ行なうべき道筋」、つまり「生き方」のことである。道徳教育の仕事は、それを子どもに習得させていくことである。

しかし、どのような「生き方」が、人間に相応しい「生き方」なのかを決定するためには、そのことの根拠が示されねばならない。すなわち、「何故」その「生き方」が人間に相応しいのか、「何故」それが「善」なのかということが弁証されねばならない。そのことは、「人生の意味」ないしは、「人生の目的」を問うことである。すなわち、「何のために」その「生き方」をすべきかを問うことである。この意味で、道徳の根底には、「人生の目的」への問いが存在し、道徳はその目的を実現する「方法」となる。

本論でとりあげようとするデューイ (John Dewey, 1859-1952) は、人生の目的は、「成長それ自体 (growth itself)」¹⁾、換言すれば、「より以上の成長 (more growth)」²⁾ を実現することにあるとする。すなわち、彼に従って言えば「成長それ自体が、唯一の道徳の目的である。」³⁾ ここには、自然の実相を進化と捉えるデューイの「自然主義 (naturalism)」⁴⁾ にもとづく生命観がある。彼は、「生命 (life)」の本質を「自己更新 (self renewal)」⁵⁾、すなわち、「成長 (growth)」⁶⁾ ととらえる。この立場からすれば、人間は、社会生活の問題を解決するという仕方、自然と社会を改造し、文明を進歩させることにおいて、自らの「知的道徳的」成長を実現してきた。この意味で、人間の生活過程は、個人と社会の相即的な成長の過程である。人生の目的は、この成長を「より以上の成長」として実現すること以外にはない。これが、デューイの人生に対する立場である。

したがって、デューイにとって、道徳の問題は、この人間の成長を「より以上」に実現していく「生き方」、すなわち、「方法」の問題である。デューイは、問題解決の過程における人間の「知性 (intelligence)」の働きを、実験的論理⁷⁾にもとづいて操作的に「範型」化し、それによって成長の過程を「方法論」的に解明する。つまり、デューイは、問題解決の過程において成長していく人間の有り方を実験的論理にもとづいて操作的に解明することによって、それを成長を実現していく「方法」として提示するのである。それが、「探究⁸⁾ (inquiry)」とよばれるものである。この意味で言えば、探究は、成長の過程であると同時にその方法という両義性をもつ。デューイは、それを「観察 (observation)」「推断 (interence)」、⁹⁾「推論 (reasoning)」といった操作によって構造化された五つの相に分節化される知的操作の過程として解明する。主題的には、そ

それは、「道徳的判断 (moral judgment)」という形で、「主観主義 (subjectivism)」⁹⁾ を克服し、客観的理論的な検証によって、普遍的な、すなわち「公平無私」な問題解決策を形成していく方法としての意義をもつ。したがって、それは、社会生活においては、その客観的理論的な検証によって、問題解決策についての「合意」を形成していくための行動規範としての意義をもつ。それはまた同時に問題解決を通しての個人の知的道徳的成長を実現する方法としての意義をもつ、すなわち、探究は、理論的実践的な「主観主義」を克服し、個人と社会の相即的な成長を実現する方法的規範としての意義をもつのである。

本論の意図は「道徳の過程は、個人の成長の過程である」というデューイの陳述を追跡することを通して以上のことを明らかにすることである。従って、本論においては、以下のような構成で論を進めることにする。まずⅡ. 道徳的状況の意味において、道徳の問題が生起する場の意味を問い、Ⅲ. 道徳の過程において、「探究」の「範型」を検討する。そして、Ⅳ. 探究の構造において、探究を方法論的に根拠づけている操作の構造を検討し、問題解決における行動規範を明らかにする。そして、Ⅴ. コミュニケーションの意義において、問題が協働的に解決されていくことのもつ意義について検討する。

Ⅱ. 道徳的状況の意味

デューイは、人間に関するあらゆる事象をそれが生起する場である人間生活の中において捉えようとする。この発生論的立場からすると道徳とは何を意味し、人間の生活においてどのような意味をもつのであろうか。まず最初にこれらの問題を検討することにする。

デューイは「自然主義 (naturalism)」⁹⁾ という立場から、自然と人間と社会の徹底した「連続性 (continuity)」を強調する。それは「生命 (life)」が環境への働きかけを通しての「自己更新」の過程であると言われる如く、人間は、自然的環境と社会的環境の支えなしには生存できないことを意味する。しかし、このことは、「生命の連続は、生物の要求に環境を絶えず再適合させていく過程」¹⁰⁾ であるという意味において理解されねばならない。この点から言えば、言語をもつことによって「知性 (intelligence)」をもつ人間においては、その生活の過程は、他者とともに道具を使用して自然を人間の要求に従って「改造」していく過程であるということを意味している。この意味で、人間の場合には、その生活は、既にいつも社会生活であり、人間の生活過程とはこの社会生活の更新の過程なのである。それ故、人間の場合には、この更新は単に生理学的な意味において理解されてはならない。なぜなら、社会生活の中には、それを可能にする言語や観念、技術や社会規範、総じて言えば生活様式というものがあり、それらも更新されていくからである。社会は、既にいつも、それに固有な伝統的「行動様式 (a way of behavior)」としての「慣習 (custom)」をもっている。社会に生きる諸個人は、それを「習慣 (habit)」という形で分有的に主体化することによって社会的に適応した行動をすることができる。それは、発生的に言えば、人間のもつ生来的な「衝動 (impuls)」が、社会生活の中で、社会的に意味のある行動様式へと組織されたものである。デューイにおいては、「道徳 (moral)」とは、この習慣によって意味される行動様式のことである。社会は、諸個人のもつこの習慣の共通性によってその同一性を保ち、諸個人はそれによって他者との協働生活を営むことができるのである。この意味で「社会 (society)」は、決して単に、諸個人が、集合していることによって成り立つのではない。

デューイに従えば、そこには人々の行動を結びつけている「共通の目的」が存在する。社会とは、この共通の目的によって結びあわされた個人から成る集団のことである。すなわち、「社会とは、共通の目的に関して働くことにおいて結びあわされた一定数の人々」¹¹⁾ のことである。

しかし、目的の共有ということには、またそれを実現する手段すなわち道具についての共通の理解が含まれている。この意味で、社会は、目的の実現に関する道具の連関と役割の連関の「共通理解 (a common understanding)」に基づいて個人の行動が相互適応的に「統制 (control)」され、目的の実現へと発展していく動的な過程にある。この相互適応的な行動によって構成される全体が「状況 (situation)」¹²⁾ とよばれるものである。この点から言えば、個人は一つの同一の状況を共有しているのであり、「各人の行動が同一の包括的状況の中に位置づけられている」¹³⁾ ののである。

社会に於ける協働的な活動が連続的に展開されている時には「状況の実践的な意味」すなわち、そこで必要な行動は明らかである。なぜなら、そこでは目的と手段についての共通理解によって個人の行動が統制的に指導されているからである。このような行動の意味が明確な状況が「確定的状況 (determinate situation)」とよばれるものである。

しかし、協働的な活動は、常に連続的に展開されていくわけではない。それは、物理的社会的な環境の変化によって中断される。それは、現実の状況の中に何らかの「問題 (a problem)」が生起したということの意味する。したがって、そこでは従来の行動様式が有効性を失い、個人の行動における統一性、すなわち協働性が失われる。状況の意味はもはや自明ではない。諸個人はどのように行動すべきか逡巡する。このような行動の意味が不明確な状況が「不確定的状況 (indeterminate situation)」とよばれるものである。

したがって、協働活動を連続させていくためには、そこに生起した問題が解決されねばならない。それは、不確定的状況を確定的状況へと「変容 (transformation)」していくことを意味する。それは、問題の解決において新たな目的と手段についての共通理解を形成することである。したがって、そこでは、各個人が問題解決策を提示しあい、どの解決策が有効かを判断し選択することが要求されているのである。デューイに従えば、このような状況が「道徳的状況 moral situation)」とよばれるものである。すなわち、「道徳的状況とは、明確な行動に先立って判断および選択が要求される状況である。この状況の実践的な意味—つまり、それを満足させるに必要な行動—は自明ではない。それは探し求められねばならない」¹⁴⁾ ののである。

しかし、この問題解決策についての共通理解、すなわち「合意」を形成していくことは単純な事態ではない。それというのも、道徳的状況に於ける従来の行動様式の有効性の喪失とは、実は、習慣の有効性の喪失を意味し、そこでは衝動が解放され、盲目的な直接的な行動となって現れようとしているからである。そのような行動は、その結果を弁えない自己中心的な行動であり、問題解決を恣意的な主観的なものにする。この意味で、衝動は、理論的にも、実践的にも主観主義の根拠である。したがって、問題解決策についての合意を形成する判断の過程は、衝動を統制し習慣へと再組織することと同時に、真に有効で、「公平無私」な問題解決策を形成していく過程、すなわち、実践的にも理論的にも主観主義を克服し、協働生活を「更新」していく過程として展開されていくのである。状況の変容によって含意されているのは、この習慣と協働生活の相即的な更新の過程なのである。

III. 道徳の過程

デューイにおいては、道徳とは、社会的な行動様式としての習慣のことである。しかし、それは、問題の生起によって再組織されていく。道徳的状况とは、そのような問題の生起によって習慣の有効性が失われ、行動についての判断が要求される状況である。したがって、そこでは、問題解決策を形成することによって習慣を再組織し、状況を変容していくことが要求される。では、状況の変容は、どのような仕方で開催されていくのか。

デューイは、この状況の変容を人間の「知性」の働きとして捉え、その働きを「探究 (inquiry)」とよぶ。それは、問題の解決に向って、「現存する諸条件を実際に変容する諸操作」¹⁵⁾ の過程である。すなわち、「探究とは、不確定的状況を、もとの状況の諸要素が一つの統一された全体へと転換されるように、その構成要素の区別と関連が確定した状況へと統制的に指導し、変容していくことである。」¹⁶⁾

したがって、探究は、道徳的状况に関して言えば、問題解決策の形成という形の「道徳的判断」の過程を意味する。デューイは、その過程を実験科学の論理にもとづいて「範型 (pattern)」化し、それを操作的に理解することによって道徳的判断の過程を客観化する。そのことによって、探究は、問題解決の「方法 (method)」としての意義をもつ。デューイは、その過程を五つの相ないしは段階によって、次の様に分節化している。第一の相は、「不確定的状況 (indeterminate situation)」第二の相は、「問題の設定 (institution of a problem)」, 第三の相は、「問題解決策の確定 (the determination of a problem-solution)」, 第四の相は、「推論 (reasoning)」第五の相は、「実験 (experiment)」である¹⁷⁾。

(一) 第一の相—不確定的状況

それは、既述した如く、問題の生起によって諸個人の行動における統一性が失われた事態、すなわち、習慣の有効性が失われた事態を意味している。そこでは、衝動が解放され直接的な行動へと現れようとしている。それと同時に、そこで知性が働き出す。それは状況における意味の不確実性が、諸個人の情緒的な不確実性をよびおこし、この不確実性が探究としての知性の働きをうながすという事態である。

(二) 第二の相—問題の設定

不確定的状況を、不確実だと感じることは状況の不確実性が情緒的に理解されたにすぎない。しかし、問題を解決するためには、情緒的な不確実性を「一つの問題」へと知的に構成することが必要である。この問題の構成は「観察 (observation)」によって、状況を構成する諸要素を「事実 (fact)」として確定し、それらの関連を究明していく操作を通して行われる。それは、個人が既にもつ知識、あるいは他からの情報によって事実を観念的に確定し、状況を分析していくことである。デューイに従えば、それは、「知的整理の過程」¹⁸⁾ である。

この観察による個々の事実の確定とそれらの関連づけによる「その事態の事実」の確定によって問題が構成される。この意味で、事実は問題を構成する「項目」をなしているのである。

(三) 第三の相—問題解決策の確定

観察による事実の確定によって問題が構成されると、それにもとづいて問題の解決策が「観念 (idea)」として現れてくる。すなわち、デューイに従えば、「観察によって問題の諸項目が構成されるまさにその時、可能的な解決策が観念として現れてくる」¹⁹⁾ のである。

したがって、ここでは、観念によって事実を確定していくのではなく、逆に、事実から観念を発見していくことが問題なのである。この事実にもとづいて観念を発見していく操作が「推断 (inference)」とよばれるものである。すなわち、「推断とは、現存するものにもとづいて現存しないものについての観念に至る過程なのである。」²⁰⁾ この意味からすると、「推断は、観察ないし過去の知識の回想によって与えられる確定された事実を越える」²¹⁾ ことを意味し、問題解決の構成という形で、問題解決における未来の「結果」を予見していくことを意味する。

しかし、問題の解決策は、それが真に問題を解決するものであることを証明されるまでは、単に主観的なものにすぎない。それは、その妥当性を証明されてはじめて解決策としての地位に着く。

(四) 第四の相一推論

構成された解決策が、真に有効であり、妥当なものであることを証明することは、その根拠づけを意味する。それは、解決策の理論的妥当性を「検証 (examination)」することである。この理論的検証が、「推論 (reasoning)」とよばれる操作である。すなわち、デューイに従えば、解決策は「所与の状況を克服する手段としての能力をもつかどうかを検証してはじめて観念となる。この検証は、推論という形をとる。」²²⁾

それは、シンボル操作としての形式的推論の形をとってなされる。それは、観念の「意味を意味として検証すること」²³⁾ である。この検証は、解決策としての観念を、それが属する知識体系の中に置いて、他の諸観念と関連づけ、その妥当性を吟味することである。デューイに従って言えば、それは、「問題になっている意味が、それが属する体系に於ける他の意味との関連において何を意味しているかを注目すること」²⁴⁾ である。

この推論の過程において当面の問題に適した解決策が構成される。それが「仮説 (hypothesis)」とよばれるものである。したがって、仮説は、もはや単なる主観的なものではなく、理論的検証を受けたものとして普遍性をもつのである。

(五) 第五の相一実験

推論を介して構成された観念、すなわち、仮説は、問題を解決していくための行動のプログラムである。したがって、最終的には、それにもとづいて行動し、問題を解決する段階が来る。それが「実験」とよばれる相である。ここで、仮説は「行動によって検証」²⁵⁾ される。問題が解決されると探究は終結し、仮説は、「善 (good)」となる。すなわち、仮説は「所与の環境の能動的再構成の道具」²⁶⁾ であるが、「その妥当性や価値は、この仕事を果たすか否かによって検証されるのであり、その役目を果たせば、信頼できるもの、健全なもの、妥当なもの、善なるもの、真なるもの」²⁷⁾ として承認されていくのである。

IV. 探究の構造

しかし、デューイによれば、探究の過程は単に個々の操作の一回的な過程ではない。デューイは、それを「事実と観念の協働」と「観察と推理の協働」という探究を構成する素材と操作という二つの面から明らかにしている。そのことによって、探究の過程を方法論的に根拠づけている「探究の構造」が明らかになる。それは、問題解決における主観主義を克服していくための規範としての意義をもつ。すなわち、それらは、問題の構成とその解決策の確定において、主観主義

を克服し、公平無私な、真の問題解決を実現していくための判断の方法ないし規則としての意義をもつ。

(一) 事実と観念の協働

既に明らかなように、探究において、事実は状況を構成する現実の諸条件として問題を構成する。そして、観念は、問題の解決策を意味する。しかし、デューイに従えば、それらは、探究における機能において相互規定的な関係をもっているのである。すなわち、デューイに従って言えば、「事実は、ある目的のために選択され、記述される。それは、問題の素材が問題を解決するに適した意味を指示するとともに、その意味の価値と妥当性を検証するのに役立つような仕方、状況に含まれた問題を陳述することである。制御された探究においては、事実は、この役割を遂行するという明白な意図をもって選択され、整理されるのである。」²⁸⁾ 他方「観念は、新たな事実を明らかにし、選択された全ての事実を一つの首尾一貫した全体へと組織するために、現存する諸条件に働きかけるための提案であり計画なのである。」²⁹⁾ このように、事実は、問題解決策としての観念を指示すると同時に、その観念を検証するという役割をもち、観念は事実を確定して問題を構成していくための導き手という役割をもつのである。

したがって、事実と観念は、事実にもとづいて現れた観念が、新たな事実を発見させ、それによって事実が組織されるという相互規定的な関係をもち、そのことによって、事実は、観念の「価値と妥当性を検証する」³⁰⁾ のである。すなわち、デューイに従って言えば、「事実の機能は、証拠として働くこと」であり、「相互に組織されうることができる限り証拠であり、観念の検証となる。その組織は事実と観念とが相互作用する時にのみ実現される。」³⁰⁾ 事実と観念の協働というのは、この相互作用のことであり、それが探究の主軸をなしている。そのことをデューイに従って言えば、次の様になる。すなわち、「観察されたある事実が、可能的解決策としての一つの観念を指示する。この観念がさらに観察を喚起する。新たに観察されたある事実が、以前に観察された事実と結びつき、その証拠としての働きに関して、他の事実を除外する、新しい秩序づけられた事実は、修正された観念を示唆する。その観念がその結果において再び新しい秩序づけられた事実を確定するような観察を喚起する。このように、統一された完結した現実の秩序が生起するまでこの相互作用は連続する。」³²⁾

このように、事実と観念の協働とは、事実が観念によって組織され、観念が事実によって検証されていく連続的な過程である。それは、観念が事実によって検証されるという点からすれば、連続的な「実験」の過程である。探究の過程はこうした実験によって統制されることによって正確な問題の設定と客観的で普遍的な問題解決策の構成へと至ることができるのである。

(二) 観察と推理の協働

事実と観念の協働は、探究を構成する素材の面からその構造を明らかにする。しかし、それは、操作の面からすれば、観察と「推理 (ideation)」と言われる観念形成の操作との協働である。従って、デューイは、「探究は、観察と推理の両方の操作を必要とする。もし、これらの操作の各々が明確に他のものと関連して構成されないなら、探究の過程は決して統制されない」³³⁾ と言う。

しかし、探究の過程から明らかな如く、観念形成の操作は、推断と推論の二つの操作である。事実と観念の協働という点からすれば操作の協働は、明らかに観察と推断の協働が意味されてい

る。なぜなら、事実と観念の協働は、「観察されたある事実が、可能的解決策を表わす一つの観念を指示し、この観念がさらに観察を指導する」³⁴⁾ことを意味していたからである。しかし、この協働性における観念は、探究の過程に則して言えば、推論における理論的検証を受けているのである。したがって、操作に於ける協働性は、実は(1)観察から推断へ(2)推断から推論へ(3)推論から推断へ(4)推断から観察へという操作の転換を意味していることになる。デューイは、そのことを「命題」の操作的転換として捉えている。

(1) 観察から推断へ

この転換は「観察によって確保される事実的諸条件の確定によって可能で適切な解決策が示唆される」³⁵⁾という仕方である。デューイに従えば、それは、「実験的観察によって確定される現実の諸条件に直接に関する命題」である「存在命題 (existential proposition)」として陳述される³⁶⁾。すなわち、ここでの解決策は、存在命題なのである。この意味で、デューイによれば、それは「推断の構成に関する命題」³⁷⁾である。

(2) 推断から推論へ

この転換は、示唆された観念は、「所与の状況を克服する手段としての能力をもつかどうかを検証してはじめて観念となる」³⁸⁾という形で生じる。このことは、観念の理論的検証として意味を意味として検証すること、示唆された観念をそれが属する知識体系の他の観念との関連でその妥当性を検証することである。したがって、デューイによれば、ここでの観念は、現存の諸条件に関わった存在命題としてではなく、観念自体の関連、すなわち「相互に関係づけられた意味から成る観念的ないし概念的な命題」³⁹⁾である「普遍命題 (universal proposition)」として陳述され、検証されているのである。この意味で、推断から推論への転換は存在命題を普遍命題へと転換するという形でなされているのである。

(3) 推論から推断へ

この転換は、普遍命題を存在命題へと転換することを意味する。なぜなら、「推論は、普遍命題を展開すること以上のことはできない」⁴⁰⁾のであり、「推論はそれ自体で事実の事柄を確定できない」⁴¹⁾からである。したがってこの点から言えば「新しく秩序づけられた事実は修正された観念(仮説)を示唆する。その観念が、その結果において再び新しい秩序づけられた事実を確定するような観察を喚起する」⁴²⁾という事実と観念の協働における観念は、統制された探究においては、いつも普遍命題から転換された存在命題として陳述されているのである。

(4) 推断から観察へ

この転換は、探究の過程に則して言えば、実験の段階である。しかし、事実と観念の協働に則して言えば、それは、「その観念がその結果において再び新しい秩序づけられた事実を確定するような観念を喚起する」⁴³⁾を意味している。それらは事実による観念の検証を意味する。それは、存在命題をもとの状況へと適用することである。実験的検証によって状況の変容が生起すれば、探究は終結する。しかし、問題解決が実現されない時には、再び観察がなされ、新しい観念が生起してくる。それは、新たな存在命題として陳述される。したがって、そこでは、存在命題から存在命題への運動、すなわち、存在命題の修正がなされているのである。しかし、デューイによれば、それは推論、つまり普遍命題に媒介されている。すなわち、「ある存在命題から他の存在命題への推断を介しての運動は、道具的媒介者としての非存在的普遍命題に依拠している」⁴⁴⁾

以上のような探究の構造からすれば、事実と観念の協働の核心は、事実にもとづく観念の検証という点にある。それは、観念の客観的妥当性の検証を意味する。そして、観察と推理の協働は、観念の理論的検証を意味する。それは、観念の普遍的妥当性の検証である。それらは、いずれも、問題の正確な把握と真に有効な問題解決策を形成するための規範であり、主観主義を克服していくための方法的原理である。加えて探究の過程として述べられた個人に於ける道徳的判断の過程は、探究の構造によって明らかにされた如く、操作的に徹頭徹尾、客観化される。したがって、そこでは全てが、「公明正大 (above board)」に、「開かれた形で (in the open)」展開されていくのである。すなわち、デューイに従って言えば、探究の「全ての段階は、明白であり、観察されることができる。そこには、諸々の諸事物から成る特殊な先行的事態が存在している。そこには、物理的および象徴的な手段を使用する特殊な操作がある。その手段も外から見ることができ、記録することができる。かくかくの対象についての判断が妥当なものであるという結論へ至った全過程が目に見えるものとなっている。したがって、その過程は遂一、誰れによっても反復されることができる」⁴⁵⁾ のものとなっているのである。これにもとづいて言えば、協働生活の問題を解決することで始まった個人の判断の過程は、操作的に追試可能なものとなる。従って、そこでは、主観的な事柄は全て追試的に検証されていく。それ故、この点から言えば、探究は、主観主義を克服した文字通り「公平無私な探究」として展開されていかざるをえないのである。したがって、デューイは、探究は、「エゴイズムとよぶほうが適切かも知れないが、しばしば主観主義とよばれるものの根元を断ち切る」⁴⁶⁾ と言うのである。それ故、以上のような点から言えばデューイにおける探究の意義は、社会的に問題を解決しなければならない状況における主観主義の克服という点にある。

V. コミュニケーションの意義

既に道徳的状况に関して明らかにされたように、諸個人の道徳的判断の過程は、協働生活の問題の解決策についての共通理解、すなわち合意を形成する過程として展開されていく。したがって、その過程は、社会集団を構成する諸個人が全員参加し、問題とその解決策をめぐって討議する過程として展開される。それゆえ、その過程は、単なる個人的な過程ではなく「社会的な過程 (social process)」である。この意味において、ここでの探究は、個々人の探究がその一部をなすような社会的な、すなわち、「協働的な探究 (cooperative inquiry)」⁴⁷⁾ として展開されていくのである。問題解決についての合意は、この探究の過程において形成されていく。それは「経験、観念、感情、価値が伝達され、共有されていく交渉の過程」⁴⁸⁾ だと言える。デューイに従えば、それがコミュニケーションの過程である。すなわち「コミュニケーションとは、人々が諸々のものを共有する方法」⁴⁹⁾ である。

しかし、道徳的状况に関して既に明らかのように、そこでは、従来の習慣から解放された衝動にもとづく盲目的な直接的行動が現れようとしている。また、個人は、その能力においても傾向性においても異なる。それは、観察や推論や推論の差異として問題の把握や問題解決策の妥当性の差異に現われてくる。この意味で、差し当っては、個々の問題解決策は、未だ社会的な合意を得るような客観性と普遍性をもってはいない主観的なものである。このような意味で、道徳的状况は、理論的にも実践的にも主観的なものが対立しているような状況なのである。それ故、デュー

ーイに従えば、道徳的状况は、「いくつかの欲望が衝突しあい、いくつかの善とみえるものが矛盾しあっている」⁵⁰⁾ 状況なのである。したがって、この対立や矛盾を止揚することは、そこから「行動の正しい方向、正しい善を発見していくこと」⁵¹⁾ であり、それが協働的な探究における問題解決についての合意を形成する過程である。その過程は、諸個人が自らの判断にもとづいて問題とその解決策を提示する過程である。したがって、その過程は、問題解決策をめぐって諸個人が対質する過程として生起する。そこでは、諸個人は、自らの解決策を根拠づけなければならない。その根拠づけは、解決策の事理的理論的検証という形をとってなされる。その過程は他者によって追試されていく。それは、相互的な過程である。この過程を通して、各人の事実の誤認理論的検証の不十分さ、そして、窃かに潜んでいた主観的関心といったものが暴露されていく。誤認は正され、検証は徹底され、私的関心は批判されていく。そのことによって、理論的実践的主観主義は克服され、問題解決策の事理的理論的検証にもとづいた真に客観的普遍的な問題解決策が形成され、それに基づいて合意が形成されていく。

従って、この協働的な探究における対質の過程から形成された問題解決策はもはや主観的なものではなく、客観的普遍的な妥当性をもったもの、すなわち「善」なるものである。この意味で「公共性とコミュニケーションに耐える力が、自称善が、本物か偽物かを決定される試金石」⁵²⁾ だとされるのである。しかし、その際の普遍性は、形而上学的な普遍性でも論理的な普遍性でもない。それは、協働生活を善くするものとして働く力をもつとして、社会的に共有されたという意味において普遍的なのである。すなわち、「普遍化とは、社会化を意味する」⁵³⁾ のである。それ故、デューイに従えば、「コミュニケーション、共有、共同参加こそ、道徳的な法則および目的を普遍化する唯一の現実的な方法」⁵⁴⁾ とされるのである。

しかし、協働的な探究において克服されているのは単なる主観主義、つまり主観的な行為の格率におけるエゴイズムだけではない。そこでは、普遍的な行為の格率の絶対化としてのエゴイズムも克服されているのである。確かに、普遍的な行為の格率は、人に心情的な確実性を与え、その行為に一貫性を与える。しかし、その心情的な確実性が固執されるとそこに普遍的な行為の格率の絶対化としてのエゴイズムが生起する。その時、探究は、不毛で非和解的な対立によって支配され、問題の協働的な解決は成立しない。なぜなら、そこでは、特殊な目的が絶対化され、問題の解決策はそれに制約されて現実と無関係に無媒介的に提示されるからである。したがって、現実の個々の具体的な問題が公平無私に解決されるには、探究が何ものにも制約されていないこと、すなわち、「観察、観念の形成、適応などの行動を妨げるような特別の目的が予め定められていないということ」⁵⁵⁾ 「探究が解放されていること」⁵⁶⁾ が必要である。そのことは、問題を明確にするのに必要ないかなる事実にも注意をはらい、解決への手がかりになりそうな示唆なら、如何なる示唆にもついていくということの意味する。この意味で、協働的な探究の過程は、「諸個人に道徳的独断を放棄する責任」⁵⁷⁾ を要求するのである。そして、このことによって、それは、普遍的格率から無媒介に提出された解決策を事理的検証と理論的検証に服させるという責任をも要求するのである。すなわち、探究は、「その最も愛する偏見を結果の検証に服させる責任を課する」⁵⁸⁾ のである。

このように、協働的な探究は、二つのエゴイズムを克服していく。それは、既に明らかのように、協働的な探究における諸個人の対質を介した事実の誤認、理論的検証の不十分性私的な関心の

検証という形で生起する。その過程を通して、諸個人は、「経験、観念、感情、価値」を相互に伝達し、共有する仕方でも問題解決策についての合意を形成していく。したがって、その過程は、単に相互批判の過程ではない。それは、相互理解の過程であり、相互学習の過程である。なぜなら、事実の誤認の訂正、理論的検証の相互補完、私的関心の批判の過程は、それを介して諸個人が、自らの知識や観念を増大させ、主観的態度を変化させていく過程であるからである。すなわち、それは、諸個人が問題解決策を形成する過程を通して新たな知識や観念を学ぶとともに、自らの主観主義を克服していく「知的道徳的」な成長の過程を意味しているのである。それが、習慣の再組織によって意味されることである。それは、デューイに従えば、「自我」の成長を意味する。なぜなら、デューイにおいては、習慣は単なる行動様式ではなく社会生活の中で習得されてきた「様々な反応の仕方や様式に対する後天的な傾向性」⁵⁹⁾として「知的情緒的傾向性」をも意味し、それらの統合が自我を形成するからである。したがって、協働的な探究としてのコミュニケーションは、「その過程に参加する当事者双方の傾向性を変容する」⁶⁰⁾と言われる時、それは明らかに、共通理解を介しての自我の成長に他ならない。それ故、デューイは、「自我は、既成のものではなく、行動の選択を通して絶えず形成されつつあるもの」⁶¹⁾だとするのである。

以上のように、デューイに於いては、道徳の過程は、協働的探究を通して実現される個人の成長の過程であり、社会生活の更新の過程である。そして、デューイにとって、その過程は、同時に教育の過程でもある。すなわち、「教育の過程は、道徳の過程と同じ」⁶²⁾である。したがって、道徳の過程の実験的論理にもとづく解明は、実は教育の過程の解明をも意味しているのである。その点から言えば、教授＝学習活動は、常に、「協働的探究」として組織されなければならない。そのことによって、デューイに従えば、学校は、協働的な子どもの知性を啓蒙するという仕方でも「社会進歩」の機関となるのである。

参 考 文 献

一. デューイの著作

- (A) The school and Society, Chicago: The University of Chicago Press, 1900. (Sixteenth Impression, 1949)
- (B) Democracy and Education, New York: The Macmillan Company, 1916. (The Free Press, First Free Press Paperback Edition, 1966)
- (C) Reconstruction in Philosophy, New York: Henry Holt and Company, 1920 (The Beacon Press, Boston, Fourth printing, 1960)
- (D) Human Nature and Conduct, New York: Herry Holt and Company, 1922. (The Modern Library, 1957)
- (E) Experience and Nature, Chicago: Open Court Publishing Company, 1925. (The Later Works VI, Southern Illinois University Press, 1981)
- (F) The Quest for Certainty, New York: Milton Balch & Co. 1929. (Paragon Books Printing, 1979)
- (G) How We Think, Revised Edition, Boston: P. C Heath & Co. 1933.
- (H) Logic: The Theory of Inquiry, New York: Herry Holt and Company, 1938. (First Irvington Edition, 1982)
- (I) A Common Faith, New Haven: Yale University, 1934 (Twenty-sixth Printing, 1972)

二 邦訳書

- (A) 『学校と社会』, 宮原誠一訳 岩波書店, 1981.
- (B) 『民主主義と教育』, 松野安男訳, 岩波書店, 1980.
- (C) 『哲学の改造』, 清水幾太郎, 清水礼子訳, 岩波書店, 1979.
- (D) 『人間性と行為』, 東宮隆訳, 春秋社, 1951
- (E) 『経験と自然』, 帆足理一郎訳, 春秋社, 1972.
- (F) 『確実性の探究』, 植田清次訳, 春秋社, 1950.
- (G) 『思考の方法』, 植田清次訳, 春秋社, 1959.
- (H) 『論理学—探究の理論』, 魚津郁夫訳 (『世界の名著, パース, ジェームズ, デューイ』中央公論社, 責任編集, 上山春平, 1980)
- (I) 『誰れでもの信仰』, 岸本英夫訳, 春秋社, 1951.

引用注の文献は(A)~(I)の記号にかえる。

<引 用 注>

- | | | | |
|----------------------|---------------------|---------------------|----------------------|
| 1) (c), p.177. | 2) (B), p.51. | 3) (C), p.177. | 4) (E), p.10. |
| 5) (B), p.2. | 6) (C), pp.162-164. | 7) (H), pp.104-105. | 8) (F), p.274. |
| 9) (E), p.10. | 10) (B), p.2. | 11) (A), p.11. | 12) (H), p.60. |
| 13) (B), p.30. | 14) (C), p.163. | 15) (H), p.106. | 16) (H), pp.104-105. |
| 17) (H), pp.101-120. | 18) (G), p.100. | 19) (H), p.109. | 20) (G), p.95. |
| 21) (G), p.96. | 22) (H), p.110. | 23) (H), p.111. | 24) (H), p.111. |
| 25) (G), p.113. | 26) (C), p.156. | 27) (C), p.156. | 28) (H), p.113. |
| 29) (H), pp.112-113. | 30) (H), p.113. | 31) (H), p.113. | 32) (H), p.113. |
| 33) (H), p.133. | 34) (H), p.113. | 35) (H), p.109. | 36) (H), p.283. |
| 37) (H), p.283. | 38) (H), p.110. | 39) (H), p.283. | 40) (H), p.283. |
| 41) (H), p.283. | 42) (H), p.113. | 43) (H), p.113. | 44) (H), p.277. |
| 45) (F), p.289. | 46) (F), p.274. | 47) (I), p.32. | 48) (C), p.207. |
| 49) (B), p.9. | 50) (C), p.163. | 51) (c), p.163. | 52) (C), p.205. |
| 53) (C), p.206. | 54) (C), p.206. | 55) (C), p.146. | 56) (C), p.146. |
| 57) (C), p.160. | 58) (C), p.160. | 59) (D), p.50. | 60) (B), p.9. |
| 61) (B), p.351. | 62) (C), p.183. | | |

(博士後期課程)